調査報告

女子看護学生の漢方薬に対する関心度について

—自己の健康観との関連および漢方教育の影響—

飯岡 秀晃

高清会高井病院産婦人科, 奈良, 〒632-0006 天理市蔵之庄町470-8

Survey of the Female Nursing Students' Degree of Interest
in Kampo Medicine

—The Relation to Self-Awareness About Health and the Effect of Kampo Education—

Hideki IIOKA

Kouseikai Takai Hospital, Department of Obstetrics and Gynecology, 470-8 Kuranosyochō Tenri-city Nara 632-0006, Japan

Abstract

Questionnaire survey was conducted to know awareness of female nursing students about state of self-health condition and the effect of Kampo education on the interest degree in Kampo. It was shown that 20% of students felt that they were not healthy and 40% of students felt that they were not confident in their health. It was also shown that many students took a painkiller to cure menstrual pain and headache. In addition, it was shown that 55% of students experienced internal use of Kampo medicine. This tendency was more prominent in students who were interested in Kampo medicine. And, there were many students who wanted to take Kampo medicine, which was effective to dysmenorrhea, headache, menstrual irregular, premenstrual syndrome, and menopausal disorders. The demand on Kampo medicine of students who were not interested in Kampo medicine were prominently increased after Kampo education used slides (papers) reading about Kampo. Those results indicate that Kampo education is also important for students who are not interested in Kampo medicine.

Key words : Kampo medicine, nursing student, education, questionnaire survey, dysmenorrhea

要旨

女子看護学生の自己の健康観および漢方薬に対する関心度に与える漢方教育の効果を知る目的でアンケートによる意識調査をおこなった。その結果、20%の学生が健康でないと、40%の学生が健康に自信がないと感じており、月経痛や頭痛に西洋薬の鎮痛剤を多くの学生が内服していた。一方、漢方薬の服薬経験者は55%におよび、漢方に関心のある群のほうが漢方薬の服薬経験が多い傾向が示された。また、多くの学生が月経痛、月経不順、頭痛、月経前症候群、更年期障害などの症状に効く漢方薬があれば服薬したいと考えていることが示され、その傾向は漢方に関心のある群のほうが高かった。さらに、漢方に関するスライド集閲覧による漢方教育により各症状に対する漢方の服薬関心度は増し、特に漢方に関心がない群では閲覧後に有意な増加を示した。従って、漢方に関心のない学生に対しても今後の漢方教育の重要性が示された。

キーワード：漢方、看護学生、教育、アンケート調査、月経痛

緒言

漢方薬は、漢方の随証治療が最適である患者に対しては西洋薬にはない治療を提供することができる場合がある。また、西洋医学では難治な病気に対しても効果を認める症例もあり、臨床の現場では、かかせない治療法のひとつになっている。ただ、医療の現場では、がん、難病、成人病、認知症など多くの疾患をかかえており国民に要する医療費は莫大な

額に達している。その一方で、医療経済効果が高いと考えられる漢方薬が、医療保険の削除対象になるという現象も生じている。漢方は個々人の証に適合した処方が必要である。しかし、証に適合した治療が出来れば思わぬ偉功を発揮することもある。学生が自らの漢方学的な証を把握しさらにその証に合った漢方薬の服薬を機会があれば経験できれば学生の漢方に対する理解はより深まってゆく可能性は高い。

表1 漢方に関するスライド説明集の内容の概要

医師が漢方薬を処方する理由	医師が漢方に効果を期待する症状
漢方薬の向いている病気例	女性の病気（更年期障害や血の道症など） 冷え性 痛み 等
二重盲検ランダム化試験により有効性が証明されている漢方薬	
漢方医学的な考え方	未病を治す（予防医学） 食療で治らなかった場合に薬を用いる
漢方医学的な捉え方	陰陽 実証 虚証 裏寒 気血水異常（気虚 気逆 気鬱 血虚 お血 水毒）
女性の漢方医学的特徴	陰証 冷え症 虚症 気逆 気虚 血の道症 等
婦人科三大漢方処方方剤の特徴	「冷え」を改善する生薬・漢方薬
月経困難 頭痛 更年期障害などに保険適応のある漢方薬	妊娠中の漢方薬
感冒漢方治療 鼻炎漢方治療 便秘漢方治療 腰痛漢方治療 認知症漢方治療	
理血剤 補血剤 補血剤 利水剤 柴胡剤などの特徴と治療効果	
漢方の副作用	低カリウム血症（甘草） 間質性肺炎（黄芩） 腸間膜静脈硬化症（山梔子）

また、看護学生が自らの漢方薬の服薬経験に基づいて、医療の現場で患者目線にあわせて漢方薬の効果を見守ることも可能となり、臨床現場での漢方の治療効果を高めてゆく上でも役立つものと考えられる。

未病を治すという漢方・東洋医学の概念が示しており、漢方薬は各個人の健康ならびQOLの向上維持に適していると考えられる¹⁾。一方、医療の現場では、平均寿命がのびる一方、健康寿命との格差がどんどん広がっていくという看護・介護にとって非常に過酷な状況になっている。2011年の日本漢方生薬製剤協会の漢方薬の利用状況アンケート調査では、医師の漢方薬の利用動機については、QOL重視の全人医療ができるからという理由もそのひとつにあげられている¹⁾。健康ならびQOLの維持・向上は、患者や高齢者のみならず、介護・看護にかかわる若い世代に関しても重要な課題である。

今回は、産婦人科的な視点から見た学生の自己の健康観と漢方薬に対する関心度との関連を明確にする目的で、今後人手不足が予想される看護の現場に将来携わる女子看護学生を対象にしてアンケート調査をおこない、学生の健康への認識ならびに漢方薬の関心度について検討をおこなった。また、あわせて、漢方に関する書面によるスライド説明集の閲覧が、学生の漢方に対する服薬関心度に与える教育効果についても検討をおこなった。

方法

(1) アンケート調査

当院において、母性看護の実習研修を受けた女子看護学生を対象にアンケート調査を実施した。実施期間は平成29年7月より平成29年12月であった。対象は上記期間内に当院で母性看護実習を実施した女子看護学生75名で、1グループ5名から7名ごとに1週間の実習期間中にアンケート調査を実施した。

方法としては、まず研究目的で漢方医学に関するアンケート調査を実施する旨を書面にて説明して同意を得た。その後に、漢方に関する110枚のスライド説明集（概要は表1）の閲覧前後で表2-1および表2-2の質問項目に回答を得た。無記名でアンケート調査に各自記載回答後、個別に回収した。

(2) 倫理的配慮

質問紙調査は無記名で実施し、匿名化した上で回答を集計分析した。また、学生の自由意思を尊重する配慮をした上でアンケート調査を施行した。事前に、アンケート調査は看護学生の漢方に対する考え方を知ることを目的に実施するものであり、個人情報が個別的に表面化することもない旨の内容を文書で説明し、承諾を得た。尚、本アンケート調査は高清会高井病院倫理審査委員会の承認（承認番号：18）および看護学校の看護学部長の許可を得た上で実施した。

(3) 統計的分析方法

統計的分析の比較には、 χ^2 検定を用い、 $p < 0.05$ を有意水準とした。結果は有意差を認めた場合は $p < 0.05$ および $p < 0.01$ の水準で示した。

(4) 利益相反

今回のアンケート調査についての利益相反は認めない。

結果

(1) アンケート調査用紙回収結果

アンケート調査対象は全員女性の看護学生（3年生）で、平均年齢は 20.9 ± 1.9 歳（20歳から27歳）で、対象者全員がアンケート調査に承諾し総数75名となった。また、すべての質問において記入漏れや無記入のものがなく無効回答はなかった。

(2) アンケート調査用紙への回答結果

漢方医学に関するスライド説明集閲覧前後の女子

表2 漢方に関するアンケート調査結果（スライド説明集閲覧前と閲覧後）

表2-1Q&A 漢方に関する書面スライド説明集の閲覧前に以下のアンケート調査への回答を得た。			
1Q	現在、健康だと感じて	A	いる 60名(80%) いない 15名(20%)
2Q	健康に自信が	A	ある 44名(59%) ない 31名(41%)
3Q	普段健康のために食事の内容に気をつけて	A	いる 44名(59%) いない 29名(41%)
4Q	あなたはストレスに強いと思うか、弱いと思うか	A	強い 41名(55%) 弱い 34名(45%)
5Q	漢方に関心が	A	ある 40名(53%) ない 35名(47%)
6Q	漢方薬を内服したことが	A	ある 43名(57%) ない 32名(43%)
7Q	月経痛に鎮痛剤(西洋薬)の内服の経験が	A	ある 57名(76%) ない 18名(24%)
8Q	頭痛に鎮痛剤(西洋薬)の内服の経験が	A	ある 52名(69%) ない 23名(31%)
9-1Q	月経痛に効果ある漢方薬があれば内服したい	A	思う 52名(69%) 思わない 23名(31%)
10-1Q	頭痛に効果ある漢方薬があれば内服したい	A	思う 52名(69%) 思わない 23名(31%)
11-1Q	月経不順に効果ある漢方薬があれば内服したい	A	思う 49名(65%) 思わない 26名(35%)
12-1Q	月経前症候群に効果ある漢方薬があれば内服したい	A	思う 48名(64%) 思わない 26名(36%)
13-1Q	更年期障害に効果ある漢方薬があれば内服したい	A	思う 46名(61%) 思わない 24名(39%)
表2-2Q&A 漢方に関する書面スライド説明集の閲覧後に次のアンケート調査への回答を得た			
9-2Q	月経痛に効果ある漢方薬があれば内服したい	A	思う 66名(88%) 思わない 9名(12%)
10-2Q	頭痛に効果ある漢方薬があれば内服したい	A	思う 65名(87%) 思わない 10名(13%)
11-2Q	月経不順に効果ある漢方薬があれば内服したい	A	思う 62名(83%) 思わない 13名(17%)
12-2Q	月経前症候群に効果ある漢方薬があれば内服したい	A	思う 63名(84%) 思わない 12名(16%)
13-2Q	更年期障害に効果ある漢方薬があれば内服したい	A	思う 62名(83%) 思わない 13名(17%)

Q:質問内容

A:回答結果

表3 漢方への関心の有無と、健康観との関係

健康に自信のない学生の割合	
漢方に関心ある群	56% (40名中23名) *
漢方に関心ない群	23% (35名中8名)
ストレスに弱いと思っている学生の割合	
漢方に関心ある群	56% (40名中23名)
漢方に関心ない群	31% (35名中11名)
食事の内容に気を付けている学生の割合	
漢方に関心ある群	73% (40名中30名) *
漢方に関心ない群	31% (35名中11名)

漢方に関心がある群と漢方に関心ない群との比較 * : P<0.05

看護学生のアンケート回答結果

スライド説明集閲覧前の学生のアンケート回答結果は回答結果は表2-1に示した通りで、全体としては学生の多くは健康と感じており、漢方薬に関心があるものが約半数、漢方薬を内服したことがあるものが約半数であるということが判明した。また、スライド説明集閲覧後の学生のアンケート回答結果は表2-2にまとめた。

(3) 女子看護学生の漢方への関心の有無と健康観との関係

学生の自己の健康観について、漢方に関心がある群と関心がない群の両群にわけ有意差検定した結果を表3にまとめた。

漢方に関心があると回答した女子看護学生のほう

が、関心がないと回答した学生に比べて健康に自信がないと回答した割合が有意に多かった。また、漢方に関心があると回答した女子看護学生のほうが、関心がないと回答した学生に比べて、食事の内容に気をつけていると回答した割合が有意に多かった。さらに、漢方に関心があると回答した女子看護学生のほうが、関心がないと回答した学生に比べて、ストレスに弱いと思っている割合が有意差はないものの多い傾向を認めた(表3)。

(4) 女子看護学生の漢方への関心の有無と漢方薬および鎮痛剤内服経験との関係

漢方薬および鎮痛剤内服経験について、漢方に関心がある群と関心がない群の両群にわけ有意差検定した結果を表4にまとめた。

表4 漢方への関心の有無と、漢方薬または鎮痛薬内服経験との関係

漢方薬内服経験ある学生の割合	
漢方に関心ある群	75% (40名中30名) *
漢方に関心ない群	31% (35名中11名)
月経痛に鎮痛薬内服経験ある学生の割合	
漢方に関心ある群	60% (40名中24名)
漢方に関心ない群	60% (35名中21名)
頭痛に鎮痛薬内服経験ある学生の割合	
漢方に関心ある群	75% (40名中30名)
漢方に関心ない群	77% (35名中27名)
漢方に関心がある群と漢方に関心ない群との比較 * :P<0.05	

表5 漢方への関心の有無と婦人の各種症状に対する漢方服薬関心度との関係 (スライド集閲覧の効果)

漢方に関心ある群	
月経痛に効果のある漢方薬を内服したい学生の割合	
スライド集閲覧前	83% (40名中33名)
スライド集閲覧後	95% (40名中38名)
頭痛に効果のある漢方薬を内服したい学生の割合	
スライド集閲覧前	85% (40名中34名)
スライド集閲覧後	95% (40名中38名)
月経不順に効果のある漢方薬を内服したい学生の割合	
スライド集閲覧前	80% (40名中32名)
スライド集閲覧後	90% (40名中36名)
月経前症候群に効果のある漢方薬を内服したい学生の割合	
スライド集閲覧前	83% (40名中33名)
スライド集閲覧後	93% (40名中37名)
更年期障害に効果のある漢方薬を内服したい学生の割合	
スライド集閲覧前	83% (40名中33名) *
スライド集閲覧後	93% (40名中37名)
漢方に関心ない群	
月経痛に効果のある漢方薬を内服したい学生の割合	
スライド集閲覧前	57% (35名中19名)
スライド集閲覧後	80% (35名中28名) #
頭痛に効果のある漢方薬を内服したい学生の割合	
スライド集閲覧前	51% (35名中18名)
スライド集閲覧後	77% (35名中27名) #
月経不順に効果のある漢方薬を内服したい学生の割合	
スライド集閲覧前	48% (35名中17名)
スライド集閲覧後	74% (35名中26名) #
月経前症候群に効果のある漢方薬を内服したい学生の割合	
スライド集閲覧前	46% (35名中16名)
スライド集閲覧後	74% (35名中26名) #
更年期障害に効果のある漢方薬を内服したい学生の割合	
スライド集閲覧前	37% (35名中13名)
スライド集閲覧後	71% (35名中25名) # #
漢方に関心がある群と漢方に関心ない群との比較 * :P<0.05	
スライド集閲覧前とスライド集閲覧後との比較 # :P<0.05 ## :P<0.01	

漢方に関心があると回答した女子看護学生のほうが、関心がないと回答した学生に比べて、漢方の内服経験が有意に多かった。一方、月経痛に対する鎮

痛薬の内服経験があるかないかの両群および、頭痛に対する鎮痛薬の内服経験があるかないかの両群については、漢方に関心ある群および関心ない群の両

者の間に有意の差を認めなかった (表4)。

(5) 女子看護学生の漢方への関心の有無と各種症状への漢方の服薬関心度との関係

各種症状への漢方の服薬関心度について、漢方に関心がある群と関心がない群の両群にわけ有意差検定した結果を表5にまとめた。

漢方に関心があると回答した女子看護学生のほうが、関心がないと回答した学生に比べて、月経痛、頭痛、月経不順、月経前症候群に効果のある漢方薬を内服したいとの回答が有意ではないが多かった。一方、漢方に関心があると回答した女子看護学生のほうが、関心がないと回答した学生に比べて、更年期障害に効果のある漢方薬を内服したいとの回答は有意に多かった (表5)。

(6) 漢方に関するスライド説明集閲覧が各種症状への漢方の服薬関心度の変化に与える影響

漢方に関するスライド説明集閲覧前後での学生の漢方の服薬関心度の変化を、漢方に関心がある群と関心がない群の両群にわけ有意差検定した結果を表5にまとめた。

漢方に関心がないと回答した女子看護学生群ではスライド説明集閲覧後では各種の症状 (月経痛、月経不順、頭痛、月経前症候群、更年期障害) に効果のある漢方薬を内服したいとの回答が有意に増加した (表5)。一方、漢方に関心があると回答した女子看護学生群ではスライド説明集閲覧後では各種の症状 (月経痛、頭痛、月経不順、月経前症候群、更年期障害) に効果のある漢方薬を内服したいとの回答が有意差はないものの増加した (表5)。

考察

医学部での漢方医学の導入普及により^{3,4)}、医療の現場で漢方薬への関心が高まってゆく可能性が高い。それに応じて、医療を支える看護師に対する漢方医学の教育の必要性も課題となりつつある^{5,6)}。一方、現在、高齢者の増加により、介護看護への負担がますます重くなりつつある。厚生省の報告では、平成22年の時点での平均寿命と健康寿命 (日常生活に制限のない期間) の差は男性では9.13年であるのに対して女性では12.68年と長く、女性の要介護期間のほうがより長いことが示されている⁷⁾。従って、女性の健康およびQOLの向上は高齢者の健康寿命の延長のみならず、将来、介護看護にかかわる若い世代に関しても重要な意味を持つ。

今回の健康についてのアンケート調査項目は主観的な自己評価であると言える。しかし、学生が抱いている自身の健康観を知る手がかりとしては役立つものと考えられる。今回の結果より、20%の女子看護学生が健康ではないと感じていることが示された。また、40%の学生から健康に自信がないとの回答が得られた。さらに、漢方に関心のある学生では過半数の55%から健康に自信がないとの回答が得られた。このことは、学生の健康への不安感が、漢方への関心を潜在的に高めている可能性を示唆しているともとらえられる。

健康およびQOLに影響を与える女性特有の要因のひとつに月経痛がある。一般女性への過去のアンケート調査では、20代の女性の過半数が月経痛のため鎮痛剤を日頃使用しており、月経痛により日常生活に支障をきたす例も少なからず存在することが報告されている⁸⁾。今回の成績でも同様に、月経痛で日ごろ鎮痛剤を内服している女子看護学生が多くいることが示された。一方、漢方に関心がある群は関心のない群に比べて、漢方薬の内服経験や食事に関心する学生が多いにもかかわらず、鎮痛剤の内服経験は漢方への関心のある群とない群の学生間で差をみとめなかった。従って、漢方への関心の有無にかかわらず痛みに対しては鎮痛剤に学生は頼っていることが示された。鎮痛剤の副作用のひとつとして、その乱用により鎮痛剤誘発頭痛が引き起こされることが報告されており、慢性頭痛の1-2%が鎮痛剤誘発とされている⁹⁾。日頃の鎮痛剤の常用は鎮痛剤誘発頭痛発症につながる可能性がある。従って、月経痛を、漢方薬でうまく予防および治療できれば、鎮痛剤の内服を減らせる可能性があり有益であると考えられる。実際、今回の調査より月経痛に効果のある漢方薬があれば内服したいと考えている学生が多くいることが示された。さらに、漢方に関心のある学生では83%にもおよび、漢方に対する学生の関心をさらに高めてゆけば、月経痛に対する漢方薬治療の受け入れは悪くない可能性が示された。

次いで、女子看護学生が将来経験する可能性のある更年期障害に対して漢方を服薬したいとする回答は漢方に関心の無い群では関心のある群に比し有意に少なかった。この結果は、今回の調査対象である学生が更年期障害と程遠い年齢対象群であることも影響している可能性もある。しかし、更年期障害に

漢方を服薬したいと考えている学生も多くおり、特に漢方に関心のある学生ではその傾向は有意に高かった。従って、長いライフステージでの漢方薬の効果に関心のあることも示された。更年期障害に対する漢方治療は日本産婦人科学会のガイドラインでも推奨されており¹⁰⁾、将来、学生自身も通過することになる更年期の理解や更年期障害の治療に対して漢方の知識は役立つ可能性は高い。また、今回、日ごろ女性が経験することが多い月経不順、頭痛、月経前症候群などに対しても効果のある漢方薬があれば服薬したいと考えている学生が多くいることが示された。この傾向は漢方に関心のある学生群では高かった。

最近では看護師のための漢方教育の書籍も発行され漢方医学を独学で学べるようになってきている¹¹⁾。今回は、書面スライド集閲覧という形のより見易い効率的な独学方法を用いて、スライド集閲覧前後で学生の漢方需要への認識がどう変化するか検討した。その結果、月経痛、頭痛、月経不順、月経前症候群、更年期障害など各種症状に漢方薬を服薬したいとする回答がスライド集閲覧後では増加した。また、スライド集閲覧の効果は漢方に関心の無い学生群ではより顕著であった。今回のアンケート調査は匿名での実施であったものの、少人数の班ごとにアンケートを取ったため、個人情報を守り切れずに結果に影響が出たかもしれない。しかしながら、漢方に関心の無い学生でも、漢方の知識にふれる機会を提供することで漢方に対する印象ならびに需要への認識が変化する可能性が示された。このことは、漢方に関心の無い看護学生に対しても今後の漢方教育の重要性を意味するものとも捉えられる。

大学医学部での漢方教育の普及にとともに³⁾⁴⁾、漢方が医療の現場で投薬される機会が増える可能性は高い。今回の調査で約半数の女子看護学生が日頃漢方に関心を示し、漢方薬の内服経験のあることが判明した。また、漢方薬内服経験のある学生の割合は漢方に関心の高い群で有意に多いこと、すなわち漢方薬の内服は漢方への関心度と関連があり、西洋薬の内服の有無は漢方薬の関心度とは関係がないとの結果が得られた。従って、漢方薬に対する興味関心が漢方の服薬を促している可能性が示された。一方、書面スライド集閲覧による漢方教育により漢方に関心なしと考えている学生群では漢方に対する服薬関

心度が有意に増加し、漢方教育が効果的であるとの結果が得られた。このことは、漢方に関心なしと考えている学生に対しては漢方教育がより影響を与えていることであり、漢方に関心の無い学生への教育介入がより有用で効果的である可能性が高いことを意味している。従って、看護教育の現場で漢方への関心を増すような漢方教育の工夫も、今後必要であり大切であることが示された。

結語

- ①女子看護学生の漢方に対する関心度に与える漢方教育の効果を知る目的に対するアンケートによる意識調査およびスライド集閲覧をおこなった。
- ②漢方の服薬経験者は55%におよび、特に漢方に関心のある群では漢方の服薬経験が75%におよび、漢方薬に対する興味関心が漢方の服薬を促している可能性が示された。
- ③月経痛、月経不順、頭痛、月経前症候群、更年期障害などの各症状に対する漢方の服薬関心度は漢方に関心のある学生群で高かった。さらに、漢方に関するスライド集閲覧による漢方教育により各症状に対する漢方の服薬関心度は増し、特に漢方に関心がない群では閲覧後に有意に増した。
- ④今回の調査より漢方に関心の無い学生に対しても教育介入は効果的であり有用性が高い可能性が示された。

利益相反 (COI) に関して開示すべきものなし。

文献

- 1) 漢方薬処方実態調査 (定量). 日本漢方生薬製剤協会報告書. 日本漢方生薬製剤協会, 東京 2011. 16.
- 2) 後山尚久. 婦人科領域における漢方療法 (女性医療と漢方). 産婦人科治療 2003; 86: 916-923.
- 3) 鈴木守. 医学教育コア・カリキュラムへの漢方医学の導入. 漢方と最新治療 2002; 11: 213-216.
- 4) 今津嘉宏, 金成俊, 小田口浩, 他. 80大学医学部における漢方教育の現状. 日東医誌 2012; 63: 121-130.
- 5) 江口優子, 竹森志穂, 吉田千文, 他. 看護職の漢方医学に関する認識と学習ニーズ. 聖路加看護学会誌 2016; 20: 19-26.
- 6) 矢久保修嗣, 木下優子, 上田ゆき子. 健康教育を将来担う大学生に対する漢方医学教育. 日東医誌 2011; 62: 65-69.
- 7) 厚生科学審議会地域保健健康増進栄養部会, 次期国民

- 健康づくり運動プラン策定専門委員会. 健康日本21 (第2次)の推進に関する参考資料. 厚生労働省, 東京 2012. 25.
- 8) 池田智子, 奥田博之. リプロダクティブステージからみた月経痛の実態. 岡山大学医学部 保健学科紀要 2005; 16: 57-66.
- 9) 日本頭痛学会. 頭痛ガイドライン. 医学書院, 東京 2013. 263-270.
- 10) 小林浩他. 産婦人科診療ガイドライン—婦人科外来編. 日本産婦人科学会, 東京 2014. 201.
- 11) 北村聖 (監修). 看護師のための漢方薬がわかる本. 協和メドインター, 東京 2017. 1-117.